

## 政治と映像

### —— 映画を教材とする政治学教育 —— (5・完)

内藤俊彦・兵藤守男

#### 目次

はじめに

#### I 政治の場

##### 1 戦争

##### 2 差別 (以上、第33巻第1号)

#### II 政治の理

##### 1 大義

##### 2 決断 (以上、第33巻第2号)

#### III 政治の気

##### 1 リーダーシップ

##### 2 スタイル (以上、第33巻第4号)

#### IV 政治の術

##### 1 権威 (以上、第36巻第2号)

##### 2 暴力

おわりに (以上、本号)

## IV 政治の術

術ではないのだろうか。

### 2 暴力

暴力は政治の術だろうか。ラスウェルのいうように、「エリートの攻防手段の主たるもの」<sup>(1)</sup>としての術だろうか、あるいは、暴力はそもそも政治の

政治が複雑でわかりづらいのか、政治の定義は論じる学者の数だけあると言われる。ともあれ、政治はどうも捉えどころがない。例えば、政治は汚い。他人を騙したり、私腹を肥やしたりす

る。政治は怖い。争い事を作り出し、戦争を生み出す。反面、政治は頼もしい。通常的手段では何ともならない時に、事態を解決する。政治は希望である。紛争当事者間に平和をもたらす。イメージは競い合い、1つが他を圧倒しないから、イメージは流転し、政治のわかりづらさは解消されない。汚くもあり、怖くもあり、頼もしくもあり、希望でもある。まるで、頭が猿、胴は狸、足は虎、尾は蛇に似ているという伝説上の動物「鵄(ヌエ)」ではないか。これも政治について、よくなされるコメントである。

政治は力にも正義にも思える。駆引だろうし、数かもしれない。また、政策であり、暴力である。どれも当てはまっているようだから、混乱する。「政治は複数の党派のあいだで繰り広げられる闘争ではなく、専門知の所有者による具体的な争点に関する審議と合意形成のプロセスであるという見解が広く受け入れられるようになっている」<sup>(2)</sup>というが、学者の常識は世間の非常識という事例かも知れない。あるいは、もはや政治一般は議論の対象ではなくなったということだろうか。

政治への期待が高まる時期には、有意義なイメージの確立が図られる。立派な社会的動物であるはずの人間が暴

力に代表される野蛮行為を繰り返す原因や理由への「不可解」が、政治のイメージ創出作業に携わる学者たちの「想い」に見え隠れする。不可解というよりは、愕然かも知れず、「ゲーテの国の民が何故ヒトラーを支持したのか…」となる。だから、古来より政治問題として暴力を考察するには適度なシニシズムを必要としてきた。

政治と暴力との関係についての標準的な説明は、暴力が政治の構成要素や性質・属性であると認めた後、一転して政治と暴力とを対置し、暴力は政治の否定であるという構成をとる。少し長くなるが、一例を挙げる<sup>(3)</sup>と、「もとより、事実の問題として、テロや戦争や内戦は人類の政治生活とともに古く、認識の問題としても、マキャベリ以来、暴力が政治の属性であることは政治学の一般的公理とみなされてきた」、「政治と暴力との間にある二重の関係」についていえば、「1つは、暴力は政治を否定するものであり暴力が始まるときに政治は終わるという関係であり、もう1つは、にもかかわらず、政治には潜在的に暴力的契機が秘められているという関係にほかならない。しかもこうした二重の関係は、政治そのものの性質から導かれる。」「政治をどのように理解するにせよ、その

核心は、社会的存在としての人間が不可避免的に引き起こす紛争を権力を媒介として解決しつつ、不断に共存関係を作り出していく作用である点にある。」「政治の困難性が暴力を生み、それが政治の不在をさらに増幅して行く現代の悲劇を克服するために[は][中略]、政治主体の間に、暴力にかえて政治そのものを可能にする国内的・地域的・国際的な公共性を改めて回復する」ことが必要である、とする。

政治は暴力との関係で、2つの政治、暴力ある政治と暴力なき政治に分類され、共存（あるいは本来の政治）を可能とする政治の確立こそが課題であるという論理構成である。暴力なき政治をひとまず「良き政治」とすれば、「政治は良き政治の敵」となる。暴力は政治に内在せず、それどころか、暴力の制御こそが政治の本来の姿だとする。例えば、「極めて常識的に考えて、暴力ないし特定集団の力に威嚇されて人々が動くとき、特定の者達の権威に従って人々が動くとき、単に惰性と習慣で人々が動くとき、特定の利益と財力に引かれて人々が動くとき、単にあらかじめ決められた規則に従って人々が動くだけであるとき、そこには政治は存在しないであろう。極めて不正確な言い方にはなるが、例えば、人々が、

議論をし、その優劣を評価する、そのことによって動く、自発的に動く、場合にだけ政治が存在する、とすることができる」<sup>(4)</sup>と、政治を限定して考察するという行き方もあるが、それなら苦勞しないという反論はあろう。

この「想い」あるいは論理の構成は広く共有され<sup>(5)</sup>、「政治は、暴力の世界における自由人の最後の言葉なのである」<sup>(6)</sup>といった格好良い定義が生まれたりもする。しかし、良き政治による政治の克服をいくら求めようとも、政治の定義（事実や叙述）から良き政治の定義（評価や価値）は導けず<sup>(7)</sup>、また、良き政治も結局の処政治である限り、暴力を背景に持つ権力性は消えることもなく、国家権力の正当性は軍事力に代表される物理的暴力の独占によって担保されている。尤も、その物理的暴力は、「伝家の宝刀」でなければならぬ制限はあるのかもしれない。

「軍隊が戦争を現実遂行しているときは、国家権力の具体的内容としての軍隊が、政治としての演技から逸脱しているときであって、それは政治の自己矛盾でしかない。軍隊は演習しているときに国家権力の内容としての本質をもっともよく具現しているのであって、戦争をじっさいにやっているときは権力自身が危険にさらされてい

る」<sup>(8)</sup>からである。

もちろん、暴力の消滅が実現しているように見える例もある。「劇場国家」では、儀礼と権力が分離し、いわば物理的強制力の行使が顕在化しないように仕組みが作られている<sup>(9)</sup>。しかし、それは単に暴力が顕れていないだけかも知れず、また、この仕組みでは、状況への変化に対応しようとする創意工夫は萎縮し、その意味で創意ある行為としての政治を発見しづらい。それに、完成度の高い管理社会にも暴力は見当たらない。『THX-1138』に描かれる世界には、暴力を感じさせない管理がある。管理者側のサディズムの問題を措けば、抵抗のないところには暴力発現の契機は薄らぐ。しかし、この管理社会も政治の否定とされるだろう。

政治は、一方で、集団の構成員が状況の改善や打開を目指し、他者との間で暴力行使を含めた利益調整を図ろうとする活動を意味し、他方で、B・クリック風にいえば、文明社会にのみ見られる、暴力回避を図る良き政治を指しているから<sup>(10)</sup>、政治と暴力との関係は厄介である。暴力も政治手段の1つだと割り切ろうとしても、良き政治の考察は完全には排除出来ず、暴力を否定する良き政治の探求においても、暴力一般ではなく、不当な暴力を排除す

べきだという議論の組立となりやすい。

そこで「人間は問題のある存在であって、性悪というのではない」のだから<sup>(11)</sup>、暴力を性善・性悪といった人間性の考察と関連づけずに政治の術として考えると、政治について大凡の定義をしておく方が便利である。認識は専ら言葉に基づくから、その対象をできるだけ明確にした方がよく、その際には定義という形式を採用することが望ましいというのは一般論としては正しいが、政治にこれだけのイメージがある以上、そもそも明解な、必要十分条件を満たすような定義が可能であるのか、また望ましいのかという疑問<sup>(12)</sup>には説得力がある。それに、定義付けが作業の目的ではないのだから、「怪しく」定義しておく方がこの政治という複雑な現象の解明には役立つという判断もある<sup>(13)</sup>。また、「現実が複雑であるときは、話も複雑にするのがことの筋道というもの」かも知れない<sup>(14)</sup>。

こうした疑問や判断が妥当であるにしても、政治と暴力の関係を考察するために、「政治は政治である」とせず、大凡の定義を試みれば、色々なタイプのものが考えられる<sup>(15)</sup>。その際考察に値する政治を「良き政治」であると考えなければ、政治は多かれ少なかれ、活動やそのプロセスあるいはそれ

を維持するシステムとなる。イーストン風の「社会的価値の権威的配分」等の他に、「[意志の遂行のためのハイアラキカルな機構を必ずしも持たない] 集合体において集合的意志を決定し遂行するプロセスのことである」という定義もある<sup>(16)</sup>。また、政治世界に着目して、政治活動は「世界観を正統的に操作する手段へのアクセス」<sup>(17)</sup>と言えるかも知れないし、象徴の作用に注目して、「政治とはとりわけ合法性、すなわち信条と記憶の有効性の問題」<sup>(18)</sup>という説明もある。

そこで、こうした定義や説明が前提としていると思われる政治の原型を考えれば、政治とは「環境を状況として読み換え、状況の中の問題に制度化や組織化で対処しようとする事」であり、上述の定義や説明はこの中のいずれかの点を強調していることになる。この場合「対処」ではなく、「対処しようとする事」であって、対処の失敗を含み、単純な紛争の解決ではない。問題状況の先送りや隠蔽もあり、解消すればそれで済む場合もあるからである。ともあれ、政治は、まずは「何とかすべきことを何とかしようとする行為」<sup>(19)</sup>であり、その目標は様々な目的に仕えうる。

この原型には、「誰が？」が欠けて

いる。「主語」は個人なのか、集団なのか。政治の成立に集団が必要だとしても、政治と集団との関係は、政治考察の最初の難点である。政治は共存を目指すとは言わないにしても、集団が維持されていること自体、つまり、何らかの「we」が成立していることに、すでに政治が作用しているとも言えるからである。「政治とは『共存関係を維持するために共存問題の解決を課題とする活動』である。われわれのすべての活動は、共存関係がすでに成立している条件の下でのみなりたつ」、「われわれは、すべての私事について公共事との相関を免責されないとの・通俗的な意味で政治的なのではなく、ヒトとしての存在の前提をなす共存問題解決を課題として課せられているとの意味で政治的なので」ある<sup>(20)</sup>。あるいは、「政治と政治的なものは同義語ではない。政治的なものの課題は、権力の偏在性を否定することではなく、共通の諸目的 (common ends) を破壊する権力の使用を否定することである。政治的なものとは、権力闘争が抑制され、さらに共通の目的である正義、平等、文化的諸価値を促進させることが可能となるような政治の諸条件を構成しようとする試みを意味している。共同性 (commonality)こそが政治的

なるものの核心に存在するものである」<sup>(21)</sup>。

個人が対処しようとする点に着目するのは、個々人の状況打開の主体性・能動性を強調している点で近代的過ぎるかも知れない。それでも、「かかる共同体の拘束や慣習から解放され、おのおの自己の趣味や考え方の違う、私の強い個人が集まって、いかに安定した社会をつくり出せるか、多年にわたって苦心のすえ造型した作品(秩序)が『政治』であり、「政治とは、古い慣習や伝統の力ではもはや利益の統合が不可能になる程度に、個人やグループの利益の分化が進行した社会において、単独者の恣意やイデオロギーや不当な実力行使によらず、不断の利益の調整を行わねばならないところでは、どこでも必要になる人間活動であり、『わざ』<sup>(22)</sup>である。集団や身分の論理が支配し、又は慣習や儀礼による対処が通例の場合があっても、集団や身分が固有の意思を持つとは考えづらく<sup>(23)</sup>、また、慣習や儀礼による対応も万全ではなく、むしろ万全ではないからその時々で内容が刷新されて、複雑な体系を持つに至ったといえる。個人世界において発生した政治も、ほとんどの場合、他者との調整が図られるから集団における意思形成(失敗を含む)が図

られる。また、個人が状況を打開しようとする側面に着目すれば、政治的活動も個々の人間の生き様に近づくので、政治考察と歴史や文学との親密な関係は崩れない。

そこで、近代主義の理解に沿って、集団は個人の集合であると考えれば、集団に生き、また集団に向き合う個人にとって、問題状況の打開に他者の同意や協力が必要であれば、その調達に尽力し、他者の反発や抵抗が邪魔ならば、その排除に奔走することになる。その問題が容易には排除しづらい他者に関わるものなら、組織化による集団意思の形成が必要となる。もとより、この意思形成も内容の不同意を含んでよいから、集団であることの同意、つまり「不同意の同意」が集団維持の必要条件となる。また、事柄の処理方法を定式化し、この定式化の受容に関係者が強い抵抗を示さないこと、つまり制度化を通じ、問題状況への対応を定型化するのも組織化に併行してなされる常套手段である。

組織化と制度化による問題への対処を目指し、それに必要な集団意思の形成を図り、一定程度以上の秩序維持を目指す活動を統治と呼ぶことにすれば、統治は単なる支配とは異なる。ヒトをモノのように扱う事例もあれば、モノ

をヒトのように扱う場合もあるにせよ、人の管理と物の管理とは区別され、統治する権力は、被治者全員に対してではないにせよ、説明を必要とする<sup>(24)</sup>。説明は集団の意思統一を図るための説得する手段であり、同意調達の側面が強まれば納得する理由や過程でもある。

この説得に際して用いられる手段（政治資源）の代表が言葉と（物理的な）暴力であって、その中間にカネ等がある。説得は共存を前提とするが、暴力は共存を否定する場合もある。生存そのものが問われる場合には、暴力を用いるのはやむを得ないとされる。

『バトル・ロワイヤル』は、同級生の殺人による生き残りゲームである。個人にとって状況の改善は共存の安定を意味するから、これも政治だと言えないこともない。他の民族の存在が自分達の生存を脅かしているといった類の議論は稀ではなく、自分達を守るべき各種領域からの排除に始まり、ひいてはその存在の否定を求める事例は事欠かない。違いは＜we＞と対置される＜they＞の範囲である。

行使される暴力は物理に限らない。笑いは暴力を無力化するが、同時に笑いも暴力となる<sup>(25)</sup>。人間が他者の認知を求めざるを得ない動物なら、他者の笑いは嗤いとなり、時に自殺へと追い

やる。また、世間の常識やステレオタイプも暴力になる<sup>(26)</sup>。構造的暴力と言えいいのかも知れないが、こちらは「主犯」が特定化しづらい分だけ、抗いがたい。抑圧は偏在する以上、抑圧の過剰を抑止し、適度な抑圧と折り合うより他ない。

このように暴力にも様々なものが挙げられるが、一般に言葉による意思統一の方が望ましいと考えるのが通常や正常であって、暴力による意思統一は忌避される。それは言葉が暴力より他者を傷つけないからではない。苦痛全般ではなく、肉体的苦痛の多寡が基準とされているからであり、加害者と被害者の確定が容易で、生存や生活への脅威が視覚上捉えやすく、直截的である分だけ、共感や同情が働きやすいからである。

暴力が、短期的には問題解決に役立つと考えられることもある。手間暇かからないからである。ただ、暴力には社会関係を長く維持する効力を欠くことは経験則から知られている。1つには、暴力を生む憎悪とその行使には、多大なエネルギーを継続して必要とするからである。不信や憎悪は断続的にのみ持続する。一方で、手間も暇もかかる言葉による説得は効率や能率には還元しづらい。戦間期のヨーロッパ各

国で、暴力を背景にしたファシズムが人気を博したのも、説得や交渉に手間かかる議会主義に代わり、効率と迅速を重視した統治が求められたからであり、ナチズムの人気とは多少理由が異なっている。民主主義が手間暇かかるものだとするれば、大衆や国民の一致した支持は民主主義の反対物である。それは、手続きの過程と結果のどちらに力点を置くのかの違いでもある。

集団の意思形成を図る制度化と組織化において、暴力が好ましい手段ではないのなら、言葉で暴力を飼い慣らしてはじめて一人前の集団だと認定される。『蠅の王』では、漂流した子供たちは孤島にたどり着き、大人の手助けなく、秩序ある社会を作らざるを得なくなる。最初は「ホラ貝」の下、集会が開かれ、生存や安全のための協力が保たれるが、次第に将来への不安が募り、島での生活の意味が問われ、「肉が食べたい」等生活の質の向上が求められると、集団の基本ルールが守られなくなる。そして、多数派は同調行動の証として、顔などに化粧を始め、従わない者への暴力行使が始まる。それでも最初は遊び感覚が濃厚だった。しかし、ピグギーと呼ばれた子供が崖から岩を頭上に落とされて死亡した際には、殺害の意図が明確にあっただけに、

殺害した者は事故だと言い訳し、残りの者は眼前の殺人にひるむが、従わざるを得なくなる。そして、殺人は一旦始まるとタブーではなくなり、化粧は一層濃くなって、狂気狂乱の中で暴力行使が生の実感を与える。子どもたちは暴力に屈し、敗北者として描かれる。

「文明度」の点で大きく見劣りするとされる暴力も、単なる物理的な行使には留まり得ない。しぐさを伴うからである。しぐさは、ものごとをする様子であり、仕方でもある。しぐさの意味は受け手との関係で成り立つから、コード、つまり特定の集団の間で広く了解された記号である。「縦に頭を振れば了解を表す」ことは日本で通じてても、インドなどでは通用しない<sup>(27)</sup>。今の処コードの世界標準は確認されていない。人間の顔の造作から考えれば、すべての人間に共通する表情があると考えたくなるが、世界標準コードの第1候補となりそうな笑顔でさえも、喜びを表すとは限らず、その下に潜むものはわからない。

特定の集団で通用するはずのコードでさえ、個々の場面では効力を発揮しない場合がある。メッセージの部分こそが効力を左右するからである。同じ言葉や動作も、使い手次第でその効果が大幅に変わる。メッセージの比重が



高い「政治は固有名詞」と言われる所以だろう。もちろん、そもそも伝達が成立するためにはコードの共有が前提であり、だからこそ、特定の集団に見られる身振りやしぐさは集団の構成員に理解できるものとなる。異文化理解とは、自分たちとは異なるコードを有する集団の存在を了解し、その上で相互理解を図ろうとすることとなる。

こうして、暴力にしぐさを読み取ることができれば、暴力を受ける側にも駆け引き (bargaining) の契機が生まれる。もちろん、この意味での暴力のゲーム化に失敗する例は少なくない。

『ダイハード1』では、人質の1人が仕事上取引に慣れているという自負もあって、ビルジャック犯人との直接交渉に入ろうとする。その人質と主犯との交渉が決裂し始めると、人質の表情は見る見るうちに変わる。犯人の外見に伺える人間性への期待や自分の高い交渉技術への確信をもってすれば、暴力行使がなされないという予断があったが、銃声とともに交渉は終了する。

言葉と暴力とを説得手段の両極に位置づけることができて、両者を簡単に峻別するわけにもいかない。言葉も暴力的であり<sup>(28)</sup>、文明世界的手段にふさわしい討論にも暴力性はつきまとうのは、日常生活にも見られる現象であ

る。また、暴力にもメッセージを伝えるという意味で言語性がある。殴るだけで済ませるのは、「この次同じようなことをやったら、この程度では済まないぞ」という台詞でもある。

暴力が手段として留まり、行使しない方が効果を高めると考えられるなら、暴力にも演技が関わる余地が生まれる。ここに、暴力はまずは見せる必要が生じる。だからこそ、見えない暴力は一層暴力的となる。『CUBE』の登場人物が当初直面した恐ろしさである。ヒトをモノだと割り切るには、戦時のように、敵を鬼畜と見なすなど、相当の心理と象徴の操作が演技に必要となる<sup>(29)</sup>。

暴力に演技性が加わる場合には、暴力行使の可能性を示唆するしぐさの出来具合が効果を左右する。実話を基にして作られた『狼たちの午後』は、二人の銀行強盗と警察、人質となった行員、報道されるにつれ銀行の周りに集まり始めた野次馬との、それぞれの駆け引きが話の幹となっている。強盗と行員との関係は、非日常に日常が入り込む。銃を突きつけることに象徴される暴力世界と、銃をおろして歓談する非暴力世界とが並行するだけでなく、人質が暴力による脅迫を日常生活の一部として受け入れ始めると、犯人の「人

柄」への共感から暴力の行使があり得ないかのように思い始め、人質もそれほど不快ではない人質生活を味わい始める。この事件の場合には、強盗の主犯(アル・パチーノ)が暴力行使に先立ち、人質たちに同意や了解を求めようとするから、行員は心を許す。これに対し、演技性を欠くもう一人の強盗とは対応の仕方が見つかりにくく、ただ気味が悪いと感じるだけである。その気味悪さを主犯も共有し、手を焼く始末である。

言葉による説得も往々にして最終手段としての暴力に依存しており、暴力も通例は生のままで行使されない。『レザボア・ドッグス』の最後に、強盗同士が拳銃を突きつけあう場面がある。強盗が失敗したのは計画がばれていたからで、誰が警察のスパイなのかを探り合う。誰が嘘を付いているのか、急拵えの集団に猜疑が深まる。それでも仲間は仲間であるから、ギリギリまで言葉による事実確認が続く。撃ってしまっただけは元も子もない。結局発砲し合うのは「弾み」である。暴力は保持するだけで威力を有するのであり、また、行使されない時に効果が最大となる。言語化された暴力である。

説得手段としての暴力が、不行使の際に効率を増すのはパラドックスでは

ある。暴力の対象者はその存在を知るだけで震え上がる。尤も、現世を重視しない者には、その本来の効果を発揮し得ない。来世に祝福や栄光があると考えれば、現世の煩わしさこそ幸福の足枷であり、従って、暴力でさえも他者を完全には服従させることは不可能であって、暴力行使も駆け引きに引きずり込まれる。ここに戦争と同様、暴力もゲームとして成立する余地がある。ゲームとしての暴力とナマの暴力との違いは小さくない。戦闘員と非戦闘員の区別等、戦争にもその度毎にルールが設定し直されるように、暴力にもその時々作法がある。素人の喧嘩は怖いと、その筋の人達という所以である。そして、暴力の対象者は、しばしば容易に従う姿勢を示しながらも、一縷の希望を抱く。そこには暴力行使の可能性への予断があり、人間性への信頼が消え去らない。

ただ、ゲームとしての暴力は、ゲームであることを忘れさせる緊張を孕み、時に生の暴力へと簡単に変わりうる。そして、一旦暴力からルールが消えたと見なされると、当事者双方は腹の虫がおさまるところまで進む。この両者の境目の設定とその見極めが政治の術であり、暴力行使のルール化が文明度を測る基準と見なされる。いわば、暴

力に段階を設定し、また、暴力行使の作法を取り決めようとするわけである。だからこそ、誰が、いつ、どこで暴力を行使しようとしているのかわからない場合に不安は高まるだけでなく、卑怯だと非難される。敵の存在の明示はひとまず安心となる。『大統領の陰謀』では、「国民の父」である大統領の不正を暴こうとする2人の新聞記者が、「ディープ・スロート」の情報提供を手がかりに事実解明に励むが、政府機関のどこかが動き始めていることを察知し、恐怖を感じ始める。それでも、この場合は大統領の陰謀であって、ミスターXの陰謀ではないから、まだしも対処方法が見つかる。これとは違い、敵が明示できない場合、対処しづらい巨大な敵が想定され、その正体が分かりづらい分だけ、「陰謀」が働いていると表現される。陰謀の傍証などいくらでも見つかるから、陰謀ゲームは解消されづらく、噂と同様、流通の速度は高まり、原因が特定できないからいつまでも維持される。

暴力の行使は望ましくないと考えられても、暴力論の厄介な点は、暴力の行使がすべて否定されるわけではない<sup>(30)</sup>点にある。時代劇で正義の味方が殺人をおかしても視聴者は暴力だとは思わない。「正しい人が正しいことを

する」のか、「正しいことをする人が正しい」のかは場合によるが、この場合は前者として理解されるのだろう。

「弱者」の暴力が正当な抵抗としてしばしば黙認・容認されるのは、暴力そのものの黙認・容認ではない。そこには、当事者間の不平等への同情を前提に、通常的手段では状況打開が困難だというやむを得ない事情が読み込まれるのであって、緊急避難としての正当性が付与される。『グラディエーター』も同様に、死闘のゲーム化を設定するが、最後の場面で死闘が決闘になると、観客は死闘に新たな意味づけをして、これを受け入れ始める。これが単なる見世物ではなく、復讐劇だと考えるからである。目的の正当性が手段の妥当性を考慮の外に置くのであり、プロレタリアートによる暴力革命の議論は物語の典型例だった。

暴力一般を否定しながらも、事情や目的が説得力を持てば、つまり、意味づけに成功すれば、暴力も容易に肯定される。『タクシードライバー』では、暴力は自分の行為とその結果についてのわかりやすい因果関係があって、ベトナム戦争との格闘の過程で強いられた自己確認のための暴力がある。居たたまれない気持ちは、周囲から見れば、主人公がベトナム戦争の被害者だとし

ても、自暴自棄の暴力と見なされる。だからこそ、弱者を装い行使される暴力や、目的を欠く暴力は嫌悪され、周囲の者はその処理に戸惑う。極悪犯罪に対して、一般人には理解できないからといって、容疑者の弁護側のみならず、学者達が心神耗弱などを主張する理由は後者の例である。「異常」だと位置付けることにより、問題の解決は望めなくとも、問題の解消が可能となる仕組みである。理解よりも了解が求められている。

暴力に関する議論は論点が尽きない。何よりも暴力は同定しづらい。最終的には、対象者の判断を主とするよりないが、冤罪の発生は防げない。周囲に暴力と見える行為も愛情として理解されることもあり、『トゥルーマン・ショウ』のように、逆もある。

『ア・フュー・グッドメン』では、命令に従った暴力行為も暴力だと結論づけるが、話はそれほど単純ではない。

『ライフ・イズ・ビューティフル』で主人公らが置かれた状況は暴力的ではあっても、『ショーシャンクの空に』のように、身寄りなき老人の釈放は、かえって死に追いやる暴力となる。

暴力の洗練度の考察も、とりわけ説得を考える上では必要となる。また、文明こそが暴力を生んだかどうかを考

察の対象となる。こうした様々な点についての考察は、紙幅の都合もあって省略するが、手段としての暴力の有効性を別として、政治の考察から暴力を排除するのではなく、暴力も政治の1つの術であることを認め、これとは一応独立したものとして、「被治者の利益に沿った統治」<sup>(31)</sup>、すなわち良き統治を考察することが必要となる。良き政治は良き統治以上のものであり、「政治」の字義に忠実に正しい政治を考察することが重要であると考えたり、治者と被治者の同一性や抑圧のない人間関係といったフィクションの実体化を進めれば、かえって政治における暴力の考察から遠のくことになる。そうしたフィクションの実体化を進めようとしても、統治手法ないし手段としての暴力行使を回避し得ないところに、政治と暴力の考察が一巡する理由がある。

(兵藤)

## おわりに

「はじめに」で書いたように、従来の文字情報に専ら依拠する教育手法は有効ではないとの疑問がある。特に、現代の大学生を念頭に置く場合には、相当困難だというのが現場の率直な感

想である。そして、多様なメディアが発達している現状に対応して、視覚教材を用いるだけでなく、視覚メディアを考察の対象とする演習もふえており、2003年度の新潟大学の例をとれば<sup>(32)</sup>、法学部吉田和比古教授による「法政演習メディア・リテラシー論」、人文学部北野圭介助教授による「文化コミュニケーション論基礎演習Ⅰ」「文化コミュニケーション論演習Ⅰ」などがある。また、この「政治と映像」と並行して、吉田教授と内藤・兵藤は、1999年度、2000年度に、「media, message and politics」を開講したこともある。この演習は実際にはほぼ講義形式で行い、映画を通じて、社会現象を読み解くセンス（リテラシー）を磨くことを目標に置き、『フィルム・ビフォー・フィルム』<sup>(33)</sup>により映画の作り方、作られ方を説明したり、映画におけるnationalityの問題や物語の作られ方、終わり方などを論じた。

本演習は政治現象の理解力を涵養することを目標においてきたが、複雑怪奇な政治を理解するには相当のセンスが求められ、結局一定程度以上の人生経験が必要であることは否定しがたい。従って、人生経験の不足を補うため、政治学の参考文献として古来より歴史や小説が挙げられてきたのだろうし、

その追体験により社会的想像力を培うことが図られてきた。追体験の手段として映画がどれほど有効なのか、映像を用いた授業の可能性を模索することが本演習の狙いであった。

こうした状況と問題意識は、政治学業界に限った話でもなさそうである。スキル習得の部分が多い法学の世界でも、近年出版された入門書の類には、イラストなどがふんだんに用いられる。特に実定法分野の教科書、参考書の老舗からも出版映画を用いた法学教育に関する著作も出版され始めている<sup>(34)</sup>。法律が適用される現場を体験させるには映画が手頃であり、また、法科大学院設置に際して、模擬法廷などの施設設置が求められるのも、医学部の解剖実習に似た臨床体験による身体訓練の上で、視覚効果の重要性が認められているからだろう。「経験を付加価値とする時代」<sup>(35)</sup>とも対応していると言える。ともあれ、いずれの分野にも同様の苦労があることがわかるし、隔世の感がある。

本稿が基にした演習は、都合5年間（6期）続けたことになる。この研究ノートでは、映像資料を用いた政治学教育の意義と問題点を探ろうと考え、演習を通じて考えたことをまとめてき

た。「政治の場」として「戦争」と「差別」を、「政治の理」として「大義」と「決断」を、「政治の気」として「リーダーシップ」と「スタイル」を、「政治の術」として「権威」と「暴力」を取り上げたが、他にも、「レトリック」、「嘘と欺瞞」、「儀式と儀礼」、「マナーと作法」、「演技」、「演出」、「カリスマや教祖」、「ステレオタイプ」、「象徴」、「笑いと風刺」、「弁明と弁解」、「神話」、「政治と非政治」などをテーマとし、演習でも部分的に取り扱った。これらについては今後の課題としてこの研究ノートを終わることにし、この演習を振り返りながら、演習の運営上で気づいた点を簡単に記して、まとめとしたい。

#### (1) 演習の運営について

演習方法には毎年少しずつではあるが、改善を施した。2年目以降は学生が上映映画を選択する方式を採用している。学生には、単に好みの映画を他の参加者に観てもらうのではなく、一定のテーマを定めて、そのテーマを説明するのにふさわしい映画を選択するという課題を与えた。発表者は最初15分程度で映画のあらすじを、次にテーマを設定した理由を簡潔に述べ、ポイントとなる課題を提示する。そして、

テーマや課題に沿って質疑応答や討論を行った。

発表者以外の学生には毎週、映画に即して設定されたテーマについて、A4で1枚(1000字)程度のレポートを書くことを課し、次週に教員と発表者に提出することとした。なお、このレポートを出席率とともに主要な評価基準とした。法学部の通常のカリキュラムでは文章を書く機会が不足するからである。その際、提出されたレポートを毎回添削して返せるかどうかは教員側の課題となった。実際には、添削するよりこちらが書き直した方が早い文章が多かったため、添削を断念せざるを得なかったが、添削して返却しなくとも、回を追うごとに次第に文章が形をなしてきたことは事実であり、練達には上達につながる例だといえる。

この方式がどの程度効果的であったかどうかは判断が難しい。政治現象を理解する能力が多少なりとも身についたかどうかは、中長期的に判断される事柄だからである。授業評価アンケートの結果は悪くはないが、教員側にはかなりの不満が残った。特定の学生を除けば、討論が活発であったとは必ずしもいえないからである。不活発の理由はいくつか考えられる。教員の「個性」や授業運営技術にも問題なしとし

ないし、政治現象を映画を通して議論するという演習は、学部演習としては相当レベルが高かったとも言える。また、新潟県や近隣諸県の出身者が多いことと関連して、学生気質もその理由として挙げられるのかも知れない。尤も、直感的には了解が得やすいこの「県民性」の問題よりも、施設設備上の事情の方が大きく作用したようである。「地方国立大学」に共通する不便により、本演習の大半をLL用の教室で行わざるを得ず、参加者にとってはとても討論向きの環境ではなかったからである。この施設・設備の問題が学生間にある種の相互抑制を促し、これに、討論慣れしていないという素質の問題が重なったようである。さらに、参加者の数の問題もあった。年度によって異なるが、20名以上だとどうしても不活発になりやすい。いずれも、今後の授業改善の課題である。

## (2) 学生が取り上げようとする映画について

ある意味で当然かもしれないが、学生が選ぶ素材は、ハリウッド映画が多数を占めた。演習に参加した学生が観ている映画の質量は一般学生よりもかなり豊富のはずだが、宮崎駿監督他のアニメ作品を除けば、共有されていた

邦画作品はわずかであり、黒澤作品ですら「文盲」に近かった。岩波ホールをはじめとした数々の意欲的な映画館がある東京ならともかく、新潟のような地方都市では観られる映画の質量はともに限られており、せいぜい流行物を揃えたビデオ店で借りられる範囲が学生の持ちネタである。その意味では衛星放送やインターネットによる配給・配信は、中央と地方との間にある文化格差を解消する可能性はあり、また、地方都市での映画祭の開催も単なる地域興し以上の意味がある。とはいえ、贅沢ではあるが、やはり銀幕とモニターの画面では何かが違うはずである。映画によってその違いは異なるにしても、スクリーンによる「スケールメリット」は否定しがたい。『2001年宇宙の旅』の迫力は、モニターでは伝わらないだろう。

## (3) 学生が選ぶテーマについて

この演習は映画論ではなく、政治学であるため、選択すべきテーマには自ずと制限がある。しかしながら、社会現象ならば、多かれ少なかれ政治とは関わりを持つため、テーマの選択幅を拡げておいたので、学生達の苦勞は当初予想していなかった。確かに、政治現象を取り上げよという大枠を設定さ

れても、政治学とは民主主義を学ぶことだと錯覚している学生には、何を取り上げたら良いのか、わからなかったと推察する。学生が希望する場合、発表の2週間前に教員の前で予行練習をすることとしたが、その際に学生のテーマで感心するものは少なく、やり直し、練り直しを命じることも多かった。本番を迎えても、学生にとって最大の問題点は、映画の選択よりもテーマの設定であったようである。

もちろん、それは、大学に入っても解答することが重視され、問題を発見し、あるいは問題を立てることが軽視されている現状のカリキュラムの問題点でもある<sup>(36)</sup>。その意味で高校生と大学生との質的差異は必ずしも小さくなっていく。問題発見能力はカリキュラムで教えてもらうものではなく、「自然と」身につくものだとの反論は以前よりあっても、例えば、『リバー・ランズ・スルー・イット』や『アメリカン・ヒストリー X』を用いた際に、それぞれ「イット」と「X」が何を指しているのかといったような、映画に即して課題を立てることさえも難しかったようである。それでも、参加学生がテーマ設定に格闘する上で、考える材料を豊富に提供してくれる点で、映画はやはり教材として優れていると再

確認したことも事実である。

学生が選択したテーマについては、資料を参照していただきたいが、ご覧いただければわかるように、個人現象や心理現象を取り上げる傾向が高く、「今どき」風である。香山リカ『若者の法則』<sup>(37)</sup>の章タイトル、「確かな自分をつかみたい」の法則、「どこかでだれかとつながりたい」の法則は当たっており、いつの時代にも共有されるこうした欲求も現代の学生には一層濃厚のようである。特に嘘や欺瞞が学生の「密かな」ペットテーマであったことが強く印象に残った。映画上映後の討論や政治学の講義で、政治的行為が純度の点で高くないことを説明したり、また、作品である映画を教材にするため、映画はどうしても、事件とその解決、それを巡る人間模様を物語にする傾向があることを確認させ、メディア・リテラシーを意識化させていることが関係しているにしても、嘘や欺瞞への強い関心は現代の若者の特徴を表しているように思われる。これについては、本研究ノートの補論として後日改めて論じたいと考えている。

以上5年間の授業報告を兼ねて、視覚教材あるいは視覚メディアの代表である映画を用いた政治学教育に関する



研究ノートを終わる。参加した学生達に感謝するとともに、この授業が何らかの形で卒業後の社会生活に役立つことを祈念している。なお、本演習は、

2000年度及び2002年度新潟大学法学部学内プロジェクトの支援を受けたことを記しておく。(兵藤)

# 註記

- (1) H・D・ラスウェル『政治』久保田きぬ子訳(岩波現代叢書、1967年)、40頁。
- (2) 澤里岳史「もう一つの民主主義」仲正昌樹編『脱構築のポリテイクス』(御茶ノ水書房、2003年)、123頁。
- (3) 以下、加藤節『政治学を問い直す』(ちくま新書、2004年)、順に98頁、99-100頁、100頁、107頁。
- (4) 木庭顕『政治の成立』(東京大学出版会、1997年)、3頁。
- (5) 参照、杉田敦『権力』(岩波書店、2003年)、49頁、53頁。
- (6) 篠原一・永井陽之助編『現代政治学入門』(有斐閣、1967年) 2頁。
- (7) 参照、三浦俊彦『論理学入門』(日本放送出版協会、2003年)、112頁以下。
- (8) 参照、戸井田道三『演技』(紀伊国屋新書、1994年)、143頁以下。
- (9) ギアツなどの劇場国家の議論はこれほど単純な話ではない。参照、永渕康之「東南アジアにおける王国と儀礼」網野善彦他編『天皇と王権を考える 1 人類社会の中の天皇と王権』(岩波書店、2002年)、257頁以下。
- (10) Cf. Bernard CRICK, *In Defence of Politics* (The Univ. of Chicago Press, 1992, Fourth Ed.), p.21-, p.140-. なお、「クリックの讃美には同調しても、政治を『高度・複雑な社会』—現代までのところおおむね西欧社会—にだけ限定する定義には同意できない」、前田康博「政治と非政治」『思想』522号(1967年12月)、76(1678)頁。
- (11) 丸山真男『増補版 現代政治の思想と行動』(未来社、1983年)、364頁。
- (12) Cf. A.James GREGOR, *Metascience & Politics: An Inquiry into the Conceptual Language of Political Science* (Transaction Pub, 2003), p.6.
- (13) 参照、永森誠一「複雑なシステムと曖昧なシンボル」(分科会B報告—システム論とシンボル論)、日本政治学会編『年報政治学1993 EU統合とヨーロッパ政治』(岩波書店、1993年)、233頁。
- (14) 内田樹『子どもはわかってくれない』(洋泉社、2003年)、20頁。
- (15) 政治の概念を整理したものとし

- て、大嶽秀夫「政治の概念と政治学の政治性」『法學』（東北大学法学会）第59巻第6号（1996年）関口榮一教授退官記念号、59-1008~59-1032頁。
- (16) 盛山和夫『権力』（東京大学出版会、2000年）、123頁。
- (17) P・ブルデュー『政治』藤本一勇・加藤晴久訳（藤原書店、2003年）、31頁。
- (18) L・スフェーズ『象徴系の政治学』田中恒寿訳（白水社、1997年）、5頁。
- (19) 英語でいえば、an (tentative) act of managing what to be managed となろうか。management を経営や管理に限定すれば、manage a smile 等の例に見られる意味の豊かさを損うだろう。
- (20) 前田康博「政治と非政治」『思想』522号（1967年12月）、67（1669）頁、82（1684）頁。
- (21) S・ウォリン『政治学批判』千葉眞他訳（みすず書房、1988年）、252-253頁。
- (22) 参照、篠原一・永井陽之助編『現代政治学入門』（有斐閣、1967年）、5-6頁。
- (23) これ自体難問である。日常的に集団を主語として表現することが多いだけでなく、集団の意思が実体的に存在すると思える場合もあるからである。Cf. Mary DOUGLAS, *How Institutions Think* (Syracuse, 1986)。
- (24) 参照、水谷三公『ラスキとその仲間』（中央公論社、1994年）、序章。
- (25) 道化と暴力の一例として、参照、G・バランディエ『舞台の上の権力』渡辺公三訳（筑摩書房、2000年）、69頁以下。
- (26) ジェンダーのステレオタイプについて、参照、斎藤美奈子『紅一点論』（筑摩書房、2002年）。
- (27) 参照、21世紀研究会編『常識の世界地図』（文春新書、2002年）に多くの事例がある。
- (28) 言語の暴力性については、参照、藤本一勇「四つの差延と脱構築の正義」仲正昌樹編『脱構築のポリテイクス』（御茶ノ水書房、2003年）、42頁以下。なお、言語が非言語に対して担う役割については、参照、佐々木健一『タイトルの魔力』（中公新書、2001年）。
- (29) 参照、一ノ瀬俊也『明治・大正・昭和軍隊マニュアル』（光文社新書、2004年）、D・グロスマン『戦争における「人殺し」の心理学』（ちくま学芸文庫、2004年）。
- (30) 参照、W・ベンヤミン『暴力批判論』（晶文社、1969年）、8頁、10頁。G・バランディエ『舞台の上の権力』渡辺公三訳（筑摩書房、2000年）、169頁。
- (31) Cf. Bernard CRICK, *In Defence of Politics* (The Univ. of Chicago Press, 1992, Fourth Ed.), p.114.
- (32) <https://gakumu.niigata-u.ac.jp/igakumu.html> を参照。
- (33) *Was geschah wirklich zwischen den Bildern?*, 1985 Ein Film von Werner Nekes, Deutschland.

- (34) 例として、石田佳治『シネマ・de・ロー』(東京リーガルマインド、1997年)、野田進・松井茂記編著『シネマで法学』(有斐閣、2000年)。
- (35) 横山征次『企画力!』(講談社現代新書、2003年)、184頁他。
- (36) 2001年度から3年間、発表訓練のために「論証と修辭」という演習を開講し、2003年度には「政治学基礎演習」の中で「問題発見」のトレーニングを試みた。2004年度からの新しいカリキュラムでは、「問題発見型演習」を2年生向けの基礎演習科目として開講している。
- (37) 香山リカ『若者の法則』(岩波新書、2002年)。

#### 資料

1999年度以前のデータは、法政理論第33巻第1号を参照のこと。

- 2000年度(参加学生30名、1年1名、2年12名、3年9名、4年以上8名、男子20名、女子10名)

第1回(2000/10/3、担当兵藤)

- ・テーマ「共同体の維持管理」「政治が現れにくい理由」
- ・上映作品『バグダッド・カフェ (Bagdad Cafe) (完全版)』(監督 Percy Adlon、主演 Marianne Sagebrecht, Jack Palance, CCH Pounder, Christine Kaufman、制作1987年西ドイツ)

第2回(2000/10/17、担当学生・川

崎淳子、田村泰士)

- ・テーマ「敗北リーダーシップと負け方、敗者の美学」
- ・上映作品『プライド 運命の瞬間』(監督伊藤俊也、主演津川雅彦、いしだあゆみ、スコット・ウィルソン、ロニー・コックス、制作1998年日本)・『カッコーの巣の上で (One Flew Over the Cuckoo's Nest)』(監督 Milos Forman、主演 Jack Nicholson, Louise Fletcher、制作1975年アメリカ)

第3回(2000/10/24、担当学生・蟹江卓、川口理恵子)

- ・テーマ「交渉」「逆らえない状況」「交渉人と決定者」
- ・上映作品『アナライズ・ミー (Analyze This)』(監督 Harold Ramis、主演 Robert DeNiro, Billy Crystal、制作1999年アメリカ)
- ・『交渉人 (The Negotiator)』(監督 F. Gary Gray、主演 Samuel L. Jackson, Kevin Spacey、制作1998年アメリカ)

第4回(2000/10/31、担当学生・堀川丈彦、渡辺裕介、小島悠子)

- ・テーマ「スタイル」
- ・上映映画『蒲田行進曲』(監督深作欣次、主演風間杜夫、平田満、松阪慶子、制作1982年日本)・『寝盗られ宗介』(監督若松孝二、主演原田芳雄、藤谷美和子、寛利夫、制作1992年日本)

第5回(2000/11/7、担当学生・内原智史、杉山陽子、古川彩子、山口泉)

・テーマ「思い込み」「思い込まされるきっかけと過程」

・上映作品『ユージュアル・サスペクツ (The Usual Suspects)』(監督 Bryan Singer、主演 Stephen Baldwin, Gabriel Byrne, Chazz Palminteri, Kevin Pollak, Kevin Spacey, Benicio Del Toro、制作1995年アメリカ)・『サマー・オブ・サム (Summer of Sam)』(監督 Spike Lee、主演 John Leguizamo, Mira Sorvino, Adrian Brody、制作1999年アメリカ)

第6回 (2000/11/28、担当学生・齊藤純、伊藤正幸、伊藤由紀、梅田紀子)

・テーマ「選択」「承知の上での選択」

・上映作品『パピヨン (Papillon)』(監督 Franklin Schaffner、主演 Steve McQueen, Dustin Hoffman, Robert Deman, Woodrow Parfrey, Don Gordon、制作1973年フランス＝アメリカ)・『リバー・ランズ・スルー・イット (A River Runs through it)』(監督 Robert Redford、主演 Craig Sheffer, Brad Pitt, Tom Skerritt, Brenda Blethyn, Emily Lloyd、制作1992年アメリカ)

第7回 (2000/12/12、担当学生・金城光優、兼田康広、塩谷啓樹)

・テーマ「葛藤」

・上映作品『マスク (The Mask)』(監督 Charles Russell、主演 Jim Carrey, Cameron Diaz, Peter Riegert, Peter Greene, Amy

Yasbeck, Richard Jeni、制作1994年アメリカ)・『ミセス・ダウト (Mrs. Doubtfire)』(監督 Chris Columbus、主演 Robin Williams, Sally Field, Pierce Brosnan, Harvey Fierstein、制作1993年アメリカ)

第8回 (2000/12/19、担当学生・畠中政充、五十嵐あゆみ、石垣晋、北智光)

・「Mission (使命)」 「Mission (使命) と命令との違い」

・上映作品『シュリ (Shuri)』(監督カン・ジェギユ、主演ハン・ソッキョ、チェ・ミンスク、キム・ユンジン、ソン・ガンホ、制作1999年韓国)・『ミッション (The Mission)』(監督 Roland Joffe、主演 Robert DeNiro, Jeremy Irons, Ray McAnally, Liam Neeson、制作1986年イギリス)

第9回 (2001/1/9、担当学生・青柳裕貴、青山高視、本間勇基、松島輝将)

・テーマ「絆」「血縁」「絆と利害」

・上映作品『レナードの朝 (Awakenings)』(監督 Penny Marshall、主演 Robert DeNiro, Robin Williams, Ruth Nelson, Julie Kavner, Penelope Ann Miller、制作1990年アメリカ)・『フィールド・オブ・ドリームス (Field of Dreams)』(監督 Phil Alden Robinson、主演 Kevin Costner, Amy Madigan, Ray Liotta, James Earl Jones, Dwier Brown)

第10回 (2001/1/23、担当学生・阿

- 部和貴、小松哲哉、南雲小百合)
- ・テーマ「組織・制度の中で生きる個人」
  - ・上映作品『大脱走 (The Great Escape)』(監督 John Sturges、主演 Steve McQueen, James Garner, Richard Attenborough, Charles Bronson, Donald Pleasance, James Donald、制作1963年アメリカ)
  - ・『ショーシャンクの空に (The Shawshank Redemption)』(監督 Frank Darabont、主演 Tim Robbins, Morgan Freeman, Bob Ganton, James Whitmore, Gil Bellows、制作1994年アメリカ)
- 2001年度前期 (参加学生10名、1年0名、2年5名、3年1名、4年以上4名、男子3名、女子7名)
- 第1回 (2001/4/12、担当・内藤)
- ・テーマ「笑いと風刺」
  - ・上映作品『独裁者 (The Great Dictator)』(監督 Charles Chaplin、主演 Charles Chaplin、制作1940年アメリカ)
- 第2回 (2001/4/19、担当・兵藤)
- ・テーマ「嘘と風刺」
  - ・上映作品『ライフ・イズ・ビューティフル (La Vita・Bella)』(監督 Roberto Benini、主演 Robert Benini, Nicoletta Braschi, Giorgio Cantarini、制作1998年イタリア)
- 第3回 (2001/4/26、担当・兵藤)
- ・テーマ「欺瞞の成立とその構造」
  - ・上映作品『ユージュアル・サスペクツ (The Usual Suspects)』(監督 Bryan Singer、主演 Stephen Baldwin, Gabriel Byrne, Kevin Spacey、制作1995年アメリカ)
- 第4回 (2001/5/10、担当学生・野村紀子)
- ・テーマ「大衆とエリート」
  - ・上映作品『ワイルド・スワン ―ベストセラーはこうして書かれた―』(主演 ユン・チアン、制作 NHK)
- 第5回 (2001/5/17、担当学生・土田雅子)
- ・テーマ「宣伝の仕組みと効果」
  - ・上映作品『広告業界で成功する方法 (How to Get Ahead in Advertising)』(監督 Bruce Robinson、主演 Richard E. Grant, Rachel Ward、制作1989年イギリス)
- 第6回 (2001/5/24、担当学生・佐藤弘美)
- ・テーマ「女性のスタイル」
  - ・上映作品『Mr. レディ、Mr. マダム (LA CAGE AUX FOLLES)』(監督 Edouard Molinaro、主演 Ugo Tognazzi, Michel Serrault、制作1978年フランス・イタリア)
- 第7回 (2001/6/7、担当学生・竹田多津子)
- ・テーマ「説得と役割」
  - ・上映作品『揺れる評決 (SWING VOTE)』(監督 David Anspaugh、主演 Andy Garcia, Harry Belafonte, Robert Prosky、制作1999年アメリカ)
- 第8回 (2001/6/14、担当学生・津田幸子)
- ・テーマ「決定のための同意調達」

- ・上映作品『12人の怒れる男／評決の行方 (12ANGRY MEN)』(監督 Willam Friedkin、主演 Jack Lemmon, George C. Scott, Edward James Olmos、制作1997年アメリカ)

第9回 (2001/6/21、担当学生・諸橋洋子)

- ・テーマ「正義の衝突」
- ・上映作品『正義の行方 (The Accused Uncle Shangang)』(監督 範元、主演李仁堂、楊華、制作1994年中国)

第10回 (2001/6/28、担当学生・高橋佳則)

- ・テーマ「集団の維持と構成員の出入進退」
- ・上映作品『アメリカンヒストリー X (AMERICAN HISTORY X)』(監督 Tony Kaye、主演 Edward Norton, Edward Furlong、制作1998年アメリカ)

第11回 (2001/7/5、担当学生・金子多美子)

- ・テーマ「説得と演技」
- ・上映作品『12人の優しい日本人』(監督 中原俊、主演塩見三省、相島一之他、制作1991年日本)

第12回 (2001/7/12、担当学生・小室英成)

- ・テーマ「殺人とそのゲーム化」
- ・上映作品『バトル・ロワイヤル (BATTLE ROYALE)』(監督 深作欣二、主演藤原竜也、ビートたけし他、制作2000年日本)

第13回 (2001/7/19、担当学生・石井和慶)

- ・テーマ「夢と現実」
- ・上映作品『ベルサイユのばら フェルゼン編』(脚本・演出植田伸爾、主演大浦みずき、ひびき美都他、制作1990年日本)

○ 2001年度後期 (参加学生30名、1年0名、2年9名、3年13名、4年以上8名、男子10名、女子20名)

第1回 (2001/10/2、担当・内藤)

- ・テーマ「失敗した篡奪者」
- ・上映作品『マクベス (MACBETH)』(監督 Roman Polanski、主演 Jon Finch, Francesca Annis, Martin Shaw、制作1971年イギリス)

第2回 (2001/10/16、担当学生・松島輝将、小林郁美、大野綾子)

- ・テーマ「集団と欺瞞」
- ・上映作品『トレインスポッティング (Trainspotting)』(監督 Danny Boyle、主演 Ewan McGregor, Ewen Bremner, Jonny Lee Miller、制作1996年イギリス)、  
『ラヂオの時間』(監督 三谷幸喜、主演唐沢寿明、西村雅彦、鈴木京香、戸田恵子、制作1997年日本)

第3回 (2001/10/23、担当学生・青柳裕貴、吉村由起子、加藤裕也)

- ・テーマ「カリスマ」
- ・上映作品『ジーザス・クライスト・スーパースター (Jesus Christ Superstar)』(監督 Norman Jewison、主演 Ted Neeley, Carl Anderson, Barry Dennen、制作1973年アメリカ)、  
『グラディエーター (Gladiator)』(監督 Ridley

- Scott、主 演 Russell Crowe, Joachin Phoenix, Connie Nielson、制作2000年アメリカ)
- 第4回 (2001/10/30、担当学生・古川彩子、大津龍平、田中学)
- ・テーマ「世代と年代」
  - ・上映作品『楢山節考』(監督今村昌平、主演緒形拳、坂本スミ子、あき竹城、制作1983年日本)、『兵隊やくざ』(監督増村保造、主演勝新太郎、田村高廣、制作1966年日本)
- 第5回 (2001/11/6、担当学生・酒井裕介、五十嵐あゆみ、小板橋摩衣子、新藤直子)
- ・テーマ「リーダーシップ」
  - ・上映作品『マイケル・コリンズ (Michael Collins)』(監督、主演、制作年)、『13デイズ (Thirteen Days)』(監督、主演、制作年)
- 第6回 (2001/11/20、担当学生・伊藤由紀、塚本怜子、阿部久美子)
- ・テーマ「秩序」
  - ・上映作品『ショコラ (Chocolat)』(監督 Lasse Hallstrom、主演 Juliette Binoche, Johnny Depp, Judy Dench、制作2000年アメリカ)、『理由なき反抗 (Rebel without a Cause)』(監督 Nicholas Lay、主演 James Dean, Natalie Wood, Sal Mineo、制作1955年アメリカ)
- 第7回 (2001/11/27、担当学生・小島悠子、長谷川奈緒、堀込創史、庄司裕暁)
- ・テーマ「共同体」
  - ・上映作品『八月の鯨 (The Whales in August)』(監督 Lindsay Anderson、主演 Bette Davis, Lillian Gish, Ann Sothorn, Vincent Price, Harry Carey, Jr.、制作1987年アメリカ)、『ザ・ビーチ (The Beach)』(監督 Danny Boyle、主演 Leonardo DiCaprio, Virginie Ledoyen, Guillaume Canet, Tilda Swinton, Robert Carlyle、制作1999年アメリカ)
- 第8回 (2001/12/4、担当学生・畠中政充、八幡美佳、渡邊晶)
- ・テーマ「決定と演技」
  - ・上映作品『キッシンジャー&ニクソン (KISSINGER AND NIXON)』(監督 Daniel Petrie、主演 Ron Silver, Beau Bridges、制作1995年アメリカ)、『エリザベス (ELIZABETH)』(監督 Shekhar Kapur、主 演 Cate Blanchett, Joseph Fiennes, Geoffrey Rush、制作1998年イギリス)
- 第9回 (2001/12/18、担当学生・石見茜、渡邊千春、入倉智子、安田晃子)
- ・テーマ「説得」
  - ・上映作品『告発 (Murder in the First)』(監督 Marco Rocco、主演 Christian Slater, Kevin Bacon, Gary Oldman、制作年1995年アメリカ)、『ある愛の詩 (Love Story)』(監督 Arthur Hiller、主演 Ryan O'Neal, Ali MacGraw、制作1970年アメリカ)
- 第10回 (2002/1/22、担当学生・新川伸、嶋田健二、三杉さやか)
- ・テーマ「敗北」

- ・上映作品『マーシャル・ロー (The Siege)』(監督 Edward Zwick、主演 Denzel Washington, Annette Bening, Bruce Willis, Tony Shalhoub、制作年1998年アメリカ)、『イヤ・オブ・ザ・ドラゴン (Year of the Dragon)』(監督 Michael Cimino、主演 Mickey Rourke, John Lone, Ariane、制作年1985年アメリカ)
- 第11回 (2002/1/29、担当・兵藤)
  - ・テーマ「孤独と孤立」「ステレオタイプと人種差別」「暴力」
  - ・上映作品『ダイハード (Die Hard)』(監督 John McTiernan、主演 Bruce Willis, Alan Rickman, Bonnie Bedelia、制作年1988年アメリカ)
- 2002年度後期 (参加学生14名、1年0名、2年2名、3年3名、4年以上9名、男子6名、女子8名)
- 第1回 (2002/10/04、担当・内藤)
  - ・テーマ「鷹に執着する理由」
  - ・上映作品『マルタの鷹 (The Maltese Falcon)』(監督 John Huston、主演 Humphrey Bogart, Mary Astor, Sydney Greenstreet, Gladys George、制作年1941年アメリカ)
- 第2回 (2002/10/11、担当学生・新川伸)
  - ・テーマ「組織と個人」
  - ・上映作品『人狼 JIN-ROH』(監督 沖浦啓之、主演 藤木義勝、武藤寿美、制作年2000年、日本)
- 第3回 (2002/10/18、担当学生・小室英成)
  - ・テーマ「軍事と象徴」
  - ・上映作品『英雄の条件 (Rules of Engagement)』(監督 William Friedkin、主演 Tommy Lee Jones, Samuel L. Jackson, Guy Pearce, Bruce Greenwood, Ben Kingsley、制作年2000年アメリカ)
- 第4回 (2002/10/25、担当学生・堀内千恵子、石見茜)
  - ・テーマ「戦いと自立」
  - ・上映作品『風と共に去りぬ (Gone with the Wind)』(監督 Victor Fleming、主演 Vivien Leigh, Clark Gable, Leslie Howard, Olivia De Havilland、制作年1939年、アメリカ)
- 第5回 (2002/11/01、担当学生・山口泉)
  - ・テーマ「欺瞞と誘導」
  - ・上映作品『スティング (The Sting)』(監督 George Roy Hill、主演 Robert Redford, Paul Newman, Robert Shaw, Charles Durning、制作年1973年アメリカ)
- 第6回 (2002/11/08、担当学生・大津龍平)
  - ・テーマ「日本と(日本)」
  - ・上映作品『ベルリン忠臣蔵 (Summer of Samurai)』(監督 ハンス・クリストフ・ブルーメンブルク、主演 ヴォルジェックス・ブショナック、ユルネリア・フローボッシュ、制作年1985年西ドイツ)
- 第7回 (2002/11/15、担当学生・検



崎聡子、小島悠子)

- ・テーマ「秩序と共同体」
- ・上映作品『ルナ・パパ (Luna Papa)』(監督 Bakhtyar Khudonazarov、主演 Chupan Khamatova, Moritz Bleibtreu, Ato Mukhamedshanov、制作年1999年ドイツ・オーストリア・日本)

第8回 (2002/11/22、担当学生・筒井雅史)

- ・テーマ「リーダーシップと決断」
- ・上映作品『突入せよ! あさま山荘事件 (The Choice of Hercules)』(監督原田眞一、主演役所広司、宇崎竜童、藤田まこと、井武雅刀、制作年2002年日本)

第9回 (2002/11/29、担当学生・小関栄美子、渡邊晶)

- ・テーマ「英雄と集団」
- ・上映作品『マジェスティック (The Majestic)』(監督 Frank Darabont、主演 Jim Carrey, Martin Landau, Laurie Holden, Gerry Black、制作年2001年アメリカ)

第10回 (2002/12/06、担当学生・小寺健太、安田晃子)

- ・テーマ「西洋と東洋」
- ・上映作品『セブンイヤーズ・イン・チベット (Seven Years in Tibet)』(監督 Jean-Jacques Annaud、主演 Brad Pitt, David Thewlis, B.D. Wong, Mako、制作年1997年アメリカ)

第11回 (2002/12/20、担当学生・高橋昌巳、新川伸)

- ・テーマ「規律と正義」
- ・上映作品『ア・フュー・グッドメン (A Few Good Men)』(監督

Rob Reiner、主演 Tom Cruise, Jack Nicholson, Demi Moore, Kevin Bacon, Kiefer Sutherland、制作年1992年アメリカ)

第12回 (2003/01/10、担当学生・小寺健太)

- ・テーマ「マスメディアと人権」
- ・上映作品『トゥルーマン・ショウ (The Truman Show)』(監督 Peter Weir、主演 Jim Carrey, Ed Harris, Laura Linney, Natasha McElhone、制作年1998年アメリカ)

第13回 (2003/01/24、担当学生・小島悠子)

- ・テーマ「役割と演技」
- ・上映作品『遊びの時間は終わらない』(監督萩庭貞明、主演本木雅弘、石橋蓮司、西川忠志、原田大二郎、萩原流行、制作年1991年日本)